

# 魏晉風潮語論

長谷川 滋 成

## はじめに

『世説新語』およびその劉孝標注に引く諸書には、特徴的に見られる語がある。

本稿では、魏より西晉を経て、東晉に定着する「清言」「名理」「玄遠」の語、それに「道」「簡」「高」「遠」「談」の語をあわせてとりあげ、これらの語が東晉風潮の重要語となる過程を説明するとともに、これら一連の語が『易』や『老子』、『莊子』、あるいは仏と関わり、これに通じている者を「風流者」「名士」ということを明らかにする。

引用書は楊勇『世説新語校箋』(正文書局)を用いる。資料の提示は時代順とし、Aは魏、Bは西晉、Cは東晉、また時代の中は話題主の五十音順とする。なお括弧内の算用数字は、使用する引用書に付されたものによる。

## 一 「清言」

A (何)晏は清言を能くし、而して当時の権勢なり。天下の談士、多く之を宗尚す。(文学6注引『文章叙録』)

晏は少くして異才有り、善く易老を談す。(同上注引『魏氏春秋』)

B (王濟は) 雋才有り、清言を能くす。(言語24注引『晉諸公贊』)

B 樂令(樂広)は清言に善きも、手筆に長ぜず。(文学70)

C (殷)浩は老易を善くし、清言を能くす。(文学27注引『浩別伝』)

C 謝鎮西(謝尚)少き時、殷浩の清言を能くするを聞く。故に往きて之に造る。(文学28)

C 兄の子の(殷)浩も亦た清言を能くし、毎に浩と談ず。(文学74注引『中興書』)

C (裴)遐と(殷)浩と並びに清言を能くす。(品藻33注) C 昨夜、殷(浩)・王(導)の清言を聴くに、甚だ佳なり。

(文学22)

C 殷中軍浩嘗て劉尹(劉惔)の所に至り清言す。良久しく

して、殷の理こと小しく屈するも、遊辞すること曰ままず。(文学33)

C(殷)仲堪 思理有りて、清言を能くす。(文学63注引『晋安帝紀』)

C(王)濛 性は和暢、清言を能くす。道を談じて理中を貴び、簡にして会する有り。古賢の顯黙の際を商畧するに、辞旨は勅令にして、往往 高致有り。(賞誉133注引『王濛別伝』)

C長史(王濛) 諸賢来たりて清言す。(文学53)

C謝太傅(謝安) 未だ冠せざるに、始めて西に出で、王長史(王濛) に詣りて、清言すること良久し。(賞誉76)

C劉尹(劉惔) は王長史(王濛) の許に至りて清言す。(白品藻48)

C許詢は清言を能くす。(言語73注引『晋中興書』)

C司空の顧和は時賢と共に清言す。(夙慧4)

C(謝)玄は清言を能くし、名理を善くす。(文学41注引『玄別伝』)

C(桓) 誦の諸母三兄は、最も行操を治め、清言を能くす。(德行26注引王隱『晋書』)

C(裴)邈は、少くして通才有り。従兄の(裴)頤は之を器賞し、与に清言する毎に、日を終へ曙に達す。(雅量11注引『晋諸公贊』)

C真長(劉惔) は之を上坐に延まぎ、清言して日を彌まふ。(文学53)

C(桓)温は劉惔に、直ただ云ふ、長衣を垂れ、清言を談ずるは、竟に是れ誰の功ぞと。(排調24注引『語林』)

「清言」の用例が東晋に圧倒的に多いのは、一目瞭然であり、「清言」をいうときは、「能くす」「善し」「談ず」の語を用いることに注目したい。「清言す」は上の三つでいえば、「談ず」に通じるであらう。

「清言」とは、同じ文中の「善く易老を談ず」「老易を善くす」よりすると、「易」や「老子」を巧妙に、談論することである。また、「思理有り」「名理を善くす」よりすると、「清言」には「理」がある。その「理」は「易」や「老子」の「理」である。要するに、「清言」は「易」や「老子」をい、それは「清き言」として認識されたのである。

「清」の字は人柄や性格に多く用いられる。そのいくつかを列挙する。清妙・清識・清通・清高・清慎・清粹・清雅・清和・清恬・清才・清新・清誉・清淡・清遠・清標・清暢・清悟・清貞・清心・清尚・清徹・清貴・清正・清平などがあり、また、次のようにも用いる。

A(山濤は阮咸を) 目して曰はく、清真寡欲にして、万物も移す能はざるなりと。(賞誉12)

B(衛) 玠は虚令の秀、清勝の氣有り。(讖鑿8注引『玠別伝』)

B(鄭)冲は、核練の才有り。清虚寡欲にして、喜んで経史を論ず。(政事6注引王隱『晋書』)

C(桓)胤は少くして清操有り。恬退を以って称せらる。(文学)

学100注引『中興書』

C 范宣は少くして隱遯を尚び、予章に家し、清潔を以て自ら立つ。(棲逸14注引『統晋陽秋』)

「寡欲」「虚令」「恬退」「隱遯」の語とあわせ用いられることよりして、これら「清」の字は老莊風の人柄や性格を表わすようである。

さて、前出の資料のうち『王濛別伝』には「清言」に關わる語が集中的に現われる。「道を談ず」「理中を貴ぶ」「簡にして会する有り」「高致有り」である。ここではこのうち「道」「簡」「高」の字をとりあげて、検討する。

まず「道」をとりあげる。

A (王) 弼は道を論じ、約美は晏に如かず。然るに自然出拔は之に過ぐ。(文学7注引『魏氏春秋』)

B 王平子(王澄)は大尉(王衍)を目すらく、阿兄は形は道に似るも、神鋒はただ雋なりと。(賞誉27)

B 失はざれば則ち大道に同じ。(文学32注引向子期郭子玄「逍遙義」)

B 唯だ(阮)咸の一家は道を尚びて事を棄て、酒を好みて貧し。(任誕10注引『竹林七賢論』)

C 余(孫綽)は少くして老莊の道を慕ひ、其の風流を仰ぐこと久し。(言語84注引「遂初賦敘」)

C (王) 述は道を体して清粹、簡貴静正なり。怡然として自足し、非類に交はらず。(賞誉62注引『晋陽秋』)

これらはすべて『易』『老子』にいう「道」「大道」である。

それは「自然」「逍遙義」「事を棄つ」「怡然として自足す」「非類に交はらず」などの語によって、知ることができる。ただし次に挙げる「道」は『易』や『老子』のそれではない。C 僧法深は(中略)内に法綱を持し、外は具瞻を允し、道を弘むるの法師なり。業慈清浄を以て、風塵に耐へず。(德行30劉孝標注)

C 声聞とは四諦を悟りて道を得るなり。縁覺とは因縁を悟りて道を得るなり。菩薩とは六度を行ひて道を得るなり。然らば則ち羅漢、道を得るは、全く仏教に由る。(中略)故に大道を以て名と為すなり。(文学37注引『法華經』)

C 維摩詰は秦には浄名と言ふ。蓋し法身の居士にして、此の土に見居し、以て道を弘むるなり。(文学50注引僧肇『注維摩經』)

C 何充は性、仏道を好み、仏寺を崇脩し、沙門に供給するに百を以て数ふ。(中略)充の弟、準も亦た精勤し、唯だ仏教を読み、寺廟を營治する而已。(排調51注引『晋陽秋』)

これらは、その証左となる語を挙げるまでもなく、すべて仏教の「道」「大道」である。

「道」はこのように『易』や『老子』のほか、仏教にも用いられる。元來『易』『老子』の語であった「道」を、仏教の「道」に用いるようになったのは、後漢の明帝(在位五七〜七五)時の傳毅の言にみえる。

漢の明帝は夜神人を夢みるに、身に日光有り。明日、博く羣臣に問ふ。通人の傳毅對へて曰はく、臣聞く、天竺の道有る者、号して仏と曰ひ、輕挙して能く飛び、身に日光有り。殆ど將に其の神ならんとすと。(文学23注引「牟子」)

「道」を有する者を「仏」とする資料としては、これはおそらく早い時期のものであろう。

なお、ここにいう「道」を有する「仏」は、仙人風である。次に示す資料よりすると、古く中国では「仏」は仙人に近い者として意識されていたのではあるまいか。

百家の中を歴観し、以って相ひ檢験するに、仙を得る者は百四十六人。其の七十四人は、已に仏經に在り。故に撰して七十を得、多聞博識の者を以って選觀すべし。(同上注引劉子政「列仙伝」)

また、仙人に「道」を用いる資料として、次のものがある。

或いは云ふ、匡俗は道を仙人に受けて、共に其の嶺に遊ぶ。遂に室を崖岫に託し、巖に即き館を成す。故に時人謂ふ、神仙の廬と為して焉に命ずと。(規箴24注引「遠法師廬山記」)

要するに、「道」は古くは「易」や「老子」、また神仙にも用いられ、それは東晋にも引きつがれるが、仏教の「道」は後漢にみえるが、東晋に至って頻度を増すことになる。

次に「簡」をとりあげる。

「簡」には簡正・簡切・簡暢・簡令・簡長・簡素・簡曠・簡秀・簡脫・簡穆・簡至・清簡・平簡・通簡・弘簡・沈簡などがあり、次のようにもある。

A (荀) 繁は簡貴、常人と交接せず。交はる所は一時の俊傑なり。(惑溺2注引「繁別伝」)

B (王) 戎は性は簡要、儀望を治めず。自ら遇すること甚だ薄し。(儉嗇3注引「晋諸公贊」)

B (王倫は) 醇粹簡遠にして、老莊の学を貴び、心を用ふること淡如たり。老子例略・周紀を為る。(排調8注引「王氏家譜」)

B (謝) 鯤は性は通簡、老易を好み、音楽を善くし、琴書を以って業と為す。(文学20注引「晋陽秋」)

これらの「簡」もおおむね人柄や性格を評する語で、同じ文中の語よりすれば、その人柄・性格は「老易」「老莊」と深く結びついた超俗のそれである。劉孝標は「簡」の典故として次のものをあげる。

易の名為るや、一言にして三義を函む。簡易は一なり。変易は二なり。不易は三なり。(鄭玄「易」序)

乾は確然として人に易を示す。坤は隤然として人に簡を示す。(「易」繫辞下) 易は則ち知り易く、簡は則ち從ひ易し。(「易」繫辞上)

易簡にして天下の理を得る。(「易」繫辞上) 人文を觀て天下を化成す。(「易」賁)

出典からわかるように、これらは「易」の語である。「簡」

は「易」とともに乾坤の特質であり、天下の「理」である。天下の「理」なる「簡」「易」を体得すると、人倫の秩序がわかり、天下を教化することができるという。「理」は理法・法則の意。「簡」は簡省・簡単、「易」は易略・平易の意で、ともに知り易く、従い易い、簡単に平易。言い換えれば複雑でもなく、困難でもない、そこに天下の理法がある。これを「易」の本質とすることから、「簡」「易」が老荘に結びつくことになる。

要するに、「簡」は「易」に出る語で、古くより用いられ、東晋に定着したというより、魏・西晋・東晋を通して、等しく用いられたということが出来る。

最後に「高」をとりあげる。

「高」には高邁・高俊・高量・高才・高行・高操・高朗・高整・高率・高暢・高雅・高徹・高遠・高潔・高爽・高素・高韻などがあり、次のようにもある。

C(袁耽は)高風振邁なり。少くして倜儻にして駑(なま)がれず。

(任誕34注引『袁氏家伝』)

C謝(安)は悠然として遠く想ひ、高世の志有り。(言語70)

C(王)胡之は常に世務を遺れ、高尚を以て情と為す。(賞

誉125注引『王胡之別伝』)

C王廙仲(王敦)は世に高尚の目を許す。(豪爽2)

C何驃騎(何充)の第五弟(何準)は、高情を以て世を

避く。(棲逸5)

C(何準は)雅より高尚を好み、徵聘せらるるも一に就く

所無し。(棲逸5注引『中興書』)

C(許詢は)高情遠致、弟子は早に已に服膺す。(品藻54)

C或いは許(詢)の高情を重んず。(品藻61)

C(戴逵は)屢々徵命を辞し、遂に高尚の称を答はず。(雅

量34注引『晋安帝紀』)

C郗超は高尚隱退を欲する者を聞く毎に、輒ち為に百万の

資を弁ず。(棲逸15)

これらの「高」もおおむね性格・人柄を評する語で、文中の語よりすれば、やはり「易」「老荘」と結びつく。

「高世」は世俗より高く拔きんでることであり、その風格が「高風」、その情思が「高情」であり、「高尚」については「易」巽に「王侯に事へず。其の事を高尚にす」とあり、疏に「復た世事を以て心と為さず、職位に係累せず。故に王侯に承事せず。但だ自尊して高く其の清虚の事を慕尚す。故に其の事を高尚にすと云ふなり」という。「高尚」とは王侯に事えぬこと、言いかえれば自らを尊しとして、「清虚」を「高く慕」うこと、つまり「世事」や「職位」に心を累わさぬことである。これは『易』であり、「老荘」である。

## 二 「名理」

A(荀)粲は太和の初め京邑に到り、傳轍と談じ、名理を

善くす。而して粲は玄遠を尚ぶ。(文学9注引『蔡別伝』)

A (鍾会は) 壮なるに及び、才数有り。名理に精練す。(言語12注引『魏志』)

B (衛) 玠は少くして名理有り。易老を善くす。(文学20注引『玠別伝』)

B (衛) 玠は少くして名理有り。善く在老に通ず。(賞誉45注引『玠別伝』)

B (裴) 遐は弁論を以て業と為す。善く名理を叙し、辞気は清暢にして、冷然として琴瑟の若し。(文学19注引鄧粲『晋紀』)

B (裴) 頴は弘濟にして清識有り。古を稽<sup>かぶ</sup>へて善く名理を言ひ、履行は高整にして、少き自り名を知らる。(言語23注引『冀州記』)

B 裴僕射(裴頴)は善く名理を談じ、混混として雅致有り。(言語23)

B (劉) 疇は善く名理を談ず。(賞誉38注引曹嘉之『晋紀』)

C 殷浩は能く名理を言ふ。(文学43注引『高逸沙門伝』)

C (王敦は) 少くして名理有り。(文学20注引『敦別伝』)

C 王(濠)は叙致して数百語を作し、自ら謂へらく、是れ名理奇藻なりと。(文学42)

C (謝) 玄は清言を能くし、名理を善くす。(文学41注引『玄別伝』)

先の「清言」をいうときに比して、いい方に幅がある。

「名理」は別に「理」一字で用いることもあり、また次のような用い方もある。玄理・本理・清理・神理・勝理・精理・才理・文理・実理・通理・理會・理識・識理・理義・義理・理思・思理。これらの中からいくつかの用例をとりあげ、「理」が「清言」とかわることを改めて指摘する。

B (阮脩は) 老易を好み、能く理を言ふ。俗人に見ふを喜ばず。(文学18注引『名士伝』)

C 江左の殷太常父子(殷融・殷浩)は並びに能く理を言ふも、亦た弁訥の異有り。(文学74)

C 然るに王脩は善く理を言ふ。(文学57劉孝標注)

C (桓) 玄は善く理を言ふ。郡を棄てて国に還り、常に殷荆州仲堪と終日談論して輟まず。(文学65注引周祇『隆安記』)

C (韓伯は) 学を好み、善く理を言ふ。(德行38注引『統晋陽秋』)

C (許) 詢は能く理を言ふ。(賞誉14注引『統晋陽秋』)

C (劉爰之は) 少くして才学有り。能く理を言ふ。(排調47注引徐広『晋紀』)

「能く言ふ」「善く言ふ」は「名理」をいうときのいい方であった。このほか「善くす」「言ふ」「談ず」「有り」とともに用いられる「理」もある。

B (王) 戎は是れ由り神理の称有り。(雅量4注引『名士伝』)

B 裴頴は理を談じ、王夷甫と相ひ推下せず。(文学11注引『晋

諸公贊」)

C (殷) 仲堪 思理有り。清言を能くす。(文学63注引「晋安帝紀」)

C (韓) 康伯は清和にして思理有り。幼くして殷浩の称する所と爲る。(賞誉90注引「統晋陽秋」)

C 其の人(虞駿) 才理勝望有り。(品藻13)

C (蔡系) 文理有り。(雅量31注引「中興書」)

C (謝) 朗は博渉にして逸才有り。善く玄理を言ふ。(文学39注引「中興書」)

C 孫盛は理義を善くす。時に中軍將軍の殷浩は名を一時に擅にし、能く与に劇談し相ひ抗する者は、唯だ盛のみ。(文学31注引「統晋陽秋」)

C (羊) 孚は雅より理義を善くす。乃ち(殷) 仲堪と齊物を道ふ。(文学62)

時代ごとの用例からすると、「名理」は魏・西晋・東晋を通じてなべて用いられるが、「理」および「理義」「玄理」「思理」「文理」「才理」などは、東晋の用例が顕著である。「理」にかかわる語が一条に多くみられるものを次に三つとりあげる。

B 魏の太常の夏侯玄・歩兵校尉の阮籍等自り、皆な道徳論を著はす。時に于いて侍中の楽広・吏部郎の劉渙も亦た道を体して言は約、尚書令の王夷甫は理を講じて才は虚、散騎常侍の戴奥は道を学ぶを以て業と爲し、後進の庾鼓の徒は皆な簡曠を希慕す。(裴) 頰は世俗を疾み、虚無

の道を尚ぶ。故に崇有・貴無の二論を著して之を折く。

才博く喩広く、学者は究むること能はず。後に楽広と頰とは清閑にして理を説かんと欲す。而して頰は辞喩豊博にして、広は自ら虚無を体するを以て、笑ひて復た言はず。(文学12注引「晋諸公贊」)

「理を講ず」「虚無の理」「理を説く」の「理」は、「道徳論」つまり「老莊」の道徳を論じたそれである。「道を体す」「道を学ぶ」の「道」や「簡曠」「清閑」もその「理」に通じる語である。

B (郭象)は、少くして才理有り、道を慕ひ学を好み、志を老莊に託す。時人咸な以て王弼の亜と爲す。(文学17注引「文士伝」)、象は莊子注を作り、最も清辞適旨有り。(同上)

「才理」は「志を老莊に託す」「莊子注を作る」「王弼の亜」よりして「老莊」にかかわる語であり、「道を慕ふ」の「道」や「清辞」もそれに通じるものである。右は西晋の例で、次は東晋の例である。

C 殷仲軍(殷浩)・孫安国(孫盛)・王(濛)・謝(尚)の能言の諸賢は、悉く会稽王(簡文帝)の許に在り。殷は孫と共に易象妙於見形を論ず。孫語る、道合すれば、意気は雲を干すと。一坐咸な孫の理に安んぜざるも、辞は屈すること能はず。会稽王は慨然として歎じて曰はく、真長(劉惔)をして来たらしむれば、故より応に以て彼を制すること有るべしと。即ち真長を迎ふれば、孫は

己れの如かざるを意<sup>せ</sup>ふ。真長既に至り、先に孫をして自ら本理を敍せしむ。孫は粗<sup>ぼ</sup>己れの語を説き、亦た絶えて向に及ばざるを覚る。劉は便ち二百許の語を作すに、辞難簡切なり。孫の理遂に屈す。一坐同時に掌を拊ちて笑ひ、称美すること良久しくす。(文学56)

「孫の理」本理の「理」は「易象妙於見形」よりすると、『易』にかかわるものであり、「道合す」の「道」や「簡切」もそれに通じ、また「能言」というのも「能く理を言ふ」ことであろう。

「能言」といういい方は次のようにある。

A (王弼は) 十余歳にして便ち莊老を好む。通弁能言し、傳<sup>へ</sup>轍の知る所と爲る。(文学6注引『弼別伝』)

B 王戎云ふ、太保(王祥)は正始中に居在し、能言の流に在らざるも、之れと言ふに及べば、理致は清遠なり。將た徳を以て其の言を掩ふこと無からんやと。(德行19)

C 劉尹(劉惔)は江道羣(江灌)を道ふ、能言ならざるも不言を能くすと。(賞誉13)

「理」を略した「能言」は「能く言ふ」「言を能くす」と訓むこともできるが、西晋から東晋にかけて「能言」として熟し、定着をみたと思われる。

「理」は「易」や「老莊」の「理」だけではなく、次のように仏の「理」にも用いる。

C 殷中軍(殷浩)は仏経を見て云ふ、理は応に阿堵の上にあるべしと。(文学23)

C 北來の道人 才理を好む有り。林公(支遁)と瓦官寺に相ひ遇ひ、小品を講ず。(文学30)

C 殷(淵源)は(康僧淵を)坐せしめ、粗<sup>ぼ</sup>与に寒温し、遂に義理に及ぶ。(文学47)

C 江を過ぐるに至り、仏理尤も盛んなり。(文学85注引『続晋陽秋』)

C 法度・道林(支遁)は同学なり。雋朗にして理義有り。遁は甚だ之を重んず。(傷逝11注引『支遁伝』)

C (康僧淵は)乃ち閑居して研講し、心を理味に希ふ。(棲逸11)

「理」を仏の「理」に用いるのは、すべて東晋になってのことである。

以上要するに、「理」は魏のころより『易』『老莊』に用いられ、東晋に集中するようになるが、その「理」が東晋に至って仏の「理」に用いるようになるのである。

### 三 「玄遠」

A 晋の文王(司馬昭)称す、阮嗣宗(阮籍)は至慎なり。

之れと言ふ毎に、言皆な玄遠にして、未だ皆て人物を臧否せずと。(德行15)

A (荀) 粲は能く玄遠を言ふ。(文学9注引『粲別伝』)

A (荀粲は) 傳轍と談じ、名理を善くす。而して粲は玄遠を尚ぶ。(同上)

A 傅嘏は善く玄勝を言ひ、荀粲は談ずるに玄遠を尚ぶ。(文学9)

B 王夷甫(王衍)は雅より玄遠を尚ぶ。(規箴9)

C (支) 遁は神心警悟にして、清識玄遠なり。王仲祖(王濛)称す、其の微を造すの功は、王弼に異ならずと。(賞誉98注引『支遁別伝』)

C (謝) 安は神情秀悟にして、善く玄遠を談ず。(文学55注引『文字志』)

「玄遠」をいうときは、「言ふ」「能く」を冠す、「談ず」「善く」を冠す、「尚ぶ」「談ずるに」「雅より」を冠すなどと用いられる。「尚ぶ」は「玄遠」だけに用いるが、「言ふ」は「名理」に、「談ず」は「清言」と「名理」にもあった。従つて「玄遠」もまた「清言」「名理」とかわる語とみられる。それは「玄遠」をいう文中に「名理を善くす」「善く玄勝を言ふ」其の微を造す功」などの語があることから知られる。「玄遠」は魏・西晋・東晋の別なく用いられる。「言ふ」「談ず」「有り」とともに用いられる「玄」としては、次のものがある。

A 裴使君(裴徽)は高才逸度有り。善く玄妙を言ふなり。(文学9注引『管輅伝』)

B 王夷甫(王衍)は容貌整麗にして、玄を談ずるに妙なり。(容止8)

B (向秀は) 神徳玄哲有り。能く天下を遺れ、万物を外にす。(文学17注引『竹林七賢論』)

「玄」は一字で用いられることもある。

C 孫綽は之を難じ、以て謂へり、玄を体し遠を識る者は、出処 帰を同じくすと。(文学91注引『中興書』)

C 而して方寸は湛然として、固に玄を以て山水に対す。

(容止24注引孫綽「庾亮碑文」)

「玄」が「清言」や「名理」、言いかえれば「易」や「老莊」と深くかわる語であることは、さらに次の用例によって明らかになるであろう。

A 正始中、王弼・何晏は老玄勝の談を好みて、世遂に焉を貴ぶ。(文学85注引『続晋陽秋』)

C (殷) 浩の清言は玄致を妙弁す。当時の名流は、皆な其の美譽を為す。(賞誉82注引徐広『晋紀』)

C 殷仲堪は玄論を精覈す。人は謂へり、研究せざる莫しと。殷は乃ち歎じて曰はく、我をして四本を解せしむれば、談は翹に爾るのみならず。(文学60)

C (支) 遁を向秀に比し、雅より老莊を尚ぶ。二子は時を異にするも、風は玄同を尚ぶなり。(文学36注引『道賢論』)

C 孫長楽は王長史(王濛) 誅を作りて云ふ、余と夫子とは、交はりは勢利に非ず、心は猶ほ澄水の若く、此の玄味を同じくすと。(輕詆22)

魏より東晋になるにつれて、「玄」の用語は増加する。玄門・玄風・玄寂・玄心・玄黙などがあり、これらも「清言」「名理」に通じるものである。

C 晋の元・明二帝は心を玄虚に遊ばせ、情を道味に託す。

賓友の礼を以って法師を待す。王公(王導)・庾公(庾亮)は心を傾け席を側にし、好みて臭味を同じくす。(方正45注引「高逸沙門伝」)

「道味」と対比されるこの「玄虚」は「易」老莊をい、「道味」は「法師」よりすると、先述した仏の「道」をいうであろう。

本節の終りに「玄遠」の「遠」「談ず」の「談」の用例をとりあげる。

「遠」としては次のようなものがある。

B 王戎云ふ、太保(王祥)は正始中に居在し、能言の流に在らざるも、之れと言ふに及べば、理致は清遠なり。将た徳を以って其の言を掩ふこと無からんやと。(德行19)

B (阮)咸の子の瞻は虚夷にして遠志有り。(賞誉29)

C (謝)安は弘粹通遠、温雅融暢なり。(德行34注引「文字志」)

C 王右軍(王羲之)は謝太傅(謝安)と共に冶城に登る。謝は悠然として遠想し、高世の志有り。(言語70)

C 孫(綽)曰はく、高情遠致は、弟子早に已に服膺せり。

一吟一詠は、許(詢)将に北面せんとすと。(品藻54)

C 之を頃くして長史(王濛)諸賢来たりて清言す。(略)言約にして旨遠く、彼我の懷を暢ぶるに足る。(文学53)

C 謝靈運は好んで曲柄笠を戴く。孔隱士(孔淳之)謂ひて曰はく、卿は心に高遠を希はんと欲するに、何ぞ曲蓋の

貌を遺ること能はざらんやと。(言語108)

これらの「遠」は同一文中の「能言」「虚夷」「高世の志」「高情」「清言」「隱士」などの語からして、「易」や「老莊」にかかわる語で、世俗から「遠」ざかる意である。

次に「談」をとりあげる。

B (衛)玠は、武昌に至りて王敦に見ゆ。敦は之と談論し、日に彌りて信宿す。(略)微言の緒、絶えて復た続く。(賞誉51注引「玠別伝」)

B 王夷甫(王衍)は好んで談称を尚び、時の人物の宗とする所と為る。(言語23注引「晋諸公贊」)

B 諸葛宏は年少くして肯へて学問せず。始め王夷甫(王衍)と談じ、便ち已に超詣す。(略)宏は後に莊老を看て、更に王と語れば、便ち相ひ抗衡するに足る。(文学13)

B 時の談に于いて、阮(咸)を首と為し、王戎之に次ぎ、山(濤)・向(秀)の徒、皆な其の倫なり。(品藻71注引「魏氏春秋」)

B 裴僕射(裴頠)は、時人謂ひて言談の林藪と為す。(賞誉18)

C (殷)浩は能く理を言ひ、談論は精微にして、老易に長ず。(賞誉86注引「中興書」)

C 劉真長(劉惔)は殷淵源(殷浩)と談するに、劉の理小しく屈するが如し。(文学26)

C 人 撫軍(司馬昱)に問ふ、殷浩の談は竟に何如と。(品藻39)

C (王) 胡之は談講を好み、善く文辞を属り、当時の重んずる所と為る。(品藻60注引『王胡之別伝』)

C (桓) 玄は善く理を言ふ。郡を棄てて国に還り、常に殷荆州仲堪と終日談論して輟まず。(文学65注引周祇『隆安記』)

これらの「談」は先の「清言を談ず」「善く名理を談ず」「善く玄遠を談ず」に通じて、やはり「易」や「老莊」にかかわるものである。

「遠」といい、「談」といい、西晋から東晋にかけて多用される、ということが出来る。

#### 四 「易老」

以上のところは、「清言」「名理」「玄遠」が「能くす」「善くす」「言ふ」「談ず」「尚ぶ」「叙す」などともに用いられるものをとりあげ、それらは「易」や「老莊」にいい、仏にもいうことを説いたが、これらとともに用いられる「清言」「名理」「玄遠」以外のものとしては、次のようである。

A (何) 晏は少くして異才有り。善く易老を談ず。(文学6注引『魏氏春秋』)

A 傅嘏は善く虚勝を言ひ、荀粲は談ずるに玄遠を尚ぶ。(文学9)

A 裴使君(裴徽)は高才逸度有り。善く玄妙を言ふなり。(文学9注引『管輅伝』)

B (衛) 玠は少くして名理有り。易老を善くす。(文学20注引『玠別伝』)

B 夷甫(王衍)は好んで談称を尚び、時の人物の宗とする所と為る。(言語23注引『晋諸公贊』)

B 郭子玄(郭象)雋才有り。能く老莊を言ふ。(賞誉26)

B 子玄(郭象)雋才有り。能く老老を言ふ。(賞誉32注引『名士伝』)

C (殷) 浩は老易を善くし、清言を能くす。(文学27注引『浩別伝』)

C (謝玄)は 神理明俊にして、微言を善くす。(言語78注引『謝車騎家伝』)

C (謝万)は 兼ねて善く文を属り、談論を能くす。時人之を称す。(賞誉93注引『中興書』)

C (支) 遁を向秀に比し、雅より老莊を尚ぶ。二子は時を異にするも、風は玄同を尚ぶなり。(文学36注引『道賢論』)

これに「好む」「貴ぶ」「慕ふ」「長ず」を加えると、次のようである。

A (王弼)は 十余歳にして便ち老莊を好む。通弁能言し、傅嘏の知る所と為る。(文学6注引『弼別伝』)

A 正始中、王弼・何晏は老玄勝の談を好みて、世遂に焉を貴ぶ。(文学85注引『統晋陽秋』)

B (王倫)は 醇粹簡遠、老莊の学を貴び、心を用ふること淡如たり。(排調8注引『王氏家譜』)

B (阮脩は) 老易を好み、能く理を言ひ、俗人を見るを喜ばず。(文学18注引『名士伝』)

B (謝 鯤は性通簡にして、老易を好み、音楽を善くし、琴書を以て業と為す。(文学20注引『晋陽秋』)

C (殷 浩は能く理を言ひ、談論は精微にして、老易に長ず。(賞誉86注引『中興書』)

C (王) 胡之は談講を好み、善く文辞を属り、当時の重んずる所と為る。(品藻60注引『王胡之別伝』)

C (何準は) 雅より高尚を好み、徵聘せらるるも一に就く所無し。(棲逸5注引『中興書』)

C 余(孫綽)は少くして老荘の道を慕ひ、其の風流を仰ぐこと久し。(言語84注引『遂初賦敘』)

C 郝太尉(郝鑿)は晩節に談を好む。(規箴14) 右にとりあげた一連のものをいま「易老」の語でまとめ、これを「清言」「名理」「玄遠」と並べて表にすると、下のようになる。

「清言」とは「易老」の言辞であり、「易老」を談論することである。「微言」とも「玄言」ともいひ、「世説新語」にはみえなかったが、「清談」ともいひ、「清談」の語はすでに後漢の書にみえる。「易老」の言辞は「清」くて、「微」かで、「玄」かったのである。

B (衛 玠は謝(鯤)を見て甚だ之を悦び、都て復た王を顧みず。遂に旦に達するまで微言す。(文学20)

C (王) 胡之は性簡にして、好んで玄言に達するなり。(賞

長○○	慕○○	貴○○	雅好○○	好○○	善敘○○	雅尚○○	好尚○○	談尚○○	尚○○	善談○○	談○○	善言○○	能言○○	善於○○	善○○	能○○	清言	名理	玄遠	易老
						名理					清言					清言		名理	玄遠	談論
							玄遠	玄遠	玄遠	玄遠			玄遠					名理		易老、老易、微言
							玄遠	玄遠	玄遠	易老			老荘					名理		玄妙・虚勝
							談称													
老易	老荘之道	老荘之学	高尚	談講、談	老易、荘老、荘老玄勝之談、	老荘														

卷四注引宋明帝『文章志』

C (謝玄は) 神理明俊にして、微言を善くす。(言語78注引)

『謝車騎家伝』

なお、「微言」は仏にも用いる。

C 阿毗雲心は、三蔵の要領、詠歌の微言なり。(文学64注引)

遠法師『阿毗雲叙』

「名理」とは『易老』の理法・哲理のことである。その理法・哲理は「名」家のように論理的であるがゆえに、「名理」と名づけたのであろう。

「玄遠」は『易老』の内実をいうものである。『易老』の内実は、「玄」<sup>ふか</sup>くて「遠」いと認識されたのであろう。「玄」は『老子』にある語で、第一章に「道の道とすべきは常の道に非ず、名の名とすべきは常の名に非ず。名無し、天地の始めには。名有り、万物の母には。故に常に無欲にして以って其の妙を觀、常に有欲にして以って其の微を觀る。此の兩者は、同じく出でて名を異にし、同じく之を玄と謂ふ。玄の又た玄、衆妙の門」とあり、「道」を「玄」とする。王弼はこれに「玄とは冥なり。默然として有る無きなり。(略)是の名は則ち之を失へば遠し。故に玄の又た玄と曰ふなり」と注する。

## 五 「風流者」

「清言」「名理」「玄遠」および「道」「簡」「高」「遠」「談」な

どの語をとりあげて説いたが、これはすべて『易』「老荘」と深くかわるものであると結論した。本節ではこれらの語が集中的に用いられる人物を魏・西晋・東晋より各一条紹介する。

魏の一条にみえるのは、傅嘏・荀粲・裴徽である。

A 傅嘏は善く虚勝を言ひ、荀粲は談ずるに玄遠を尚ぶ。共に語り、争ひて相ひ喻らざること有るに至る毎に、裴冀州(裴徽)は一家の義を釈き、彼我の懐を通じ、常に両情をして皆な得て、彼此俱に暢ばしむ。(文学9)

(傅) 嘏は嘗て才性同異を論ず。(同上注引『魏志』)

(傅) 嘏は既に治に達し正を好むも、清理識要有り。好んで才性を論ずるは、原本精微にして、能く之に及ぶもの鮮し。(同上注引『傅子』)

(荀) 粲は能く玄遠を言ふ。(同上注引『蔡別伝』)

(荀) 粲は太和の初め京邑に到り、傅嘏と談じ、名理を善くす。而して粲は玄遠を尚ぶ。(同上注引『蔡別伝』)

裴使君(裴徽)は高才逸度有り。善く玄妙を言ふなり。(同上注引『管輅伝』)

西晋の一条は王澄と衛玠である。

B 王平子(王澄)は邁世にして精才有り、推服する所少きも、衛玠の言を聞く毎に、輒ち歎息して絶倒す。(賞誉45)

(衛) 玠は少くして名理有り、善く莊老に通ず。琅邪の王平子(王澄)は高氣羣せず、邁世にして独り傲る。玠の語議を聞き、理会の間、要妙の際に至る毎に、輒ち坐

に絶倒す。前後三たび聞き、之が為に三たび倒る。時人遂に曰はく、衛君道を談ずるに、平子三たび倒ると。(同上注引『玠別伝』)

王澄、字は平子。達識有り。(徳行23注引『晋諸公贊』)東晋の一条は王濛である。

C濛は性和暢にして、清言を能くす。道を談じて理中を貴び、簡にして会する有り。古賢を商榷し、顕黙の際、辞旨勅令、往往にして高致有り。(賞誉133注引『王濛別伝』)さて、「清言」「名理」「玄遠」の『易』や『老莊』に通曉することすることを「風流」という。

C范豫章(范寧)は王荊州(王忱)を謂ふ、卿の風流雋望は、真に後来の秀なりと。(賞誉130)

C王(爽)答へて曰はく、風流の秀出なるは、臣は(王)恭に如かず。忠孝なるは亦た何ぞ以って人に仮るべけんやと。(方正64)

C祖父は(王)濛、司徒左長史なり。風流の標望あり。(徳行44注引周祇『隆安記』)

C(王)濛は神氣清韶なり。十余歳にして、放適にして羣せず。弱冠にして檢尚、風流雅正なり。外は榮競を絶ち、内は私欲寡なし。(言語66注引『王長史別伝』)

C凡そ風流を称する者は、皆な王(濛)・劉(惔)を挙げて宗と爲す。(品藻36注引徐広『晋紀』)

C(周)顛は風流才氣有り。少くして名を知らる。(言語30注引『晋陽秋』)

C余(孫綽)は少くして老莊の道を慕ひ、其の風流を仰ぐこと久し。(言語84注引「遂初賦敘」)

C咨予(孫綽)と公(庾亮)とは、風流帰を同じくす。(方正48注引『綽集』載「誄文」)

C是に於いて大いに庾(亮)が唯に風流なるのみに非ず、兼ねて治実有るを歎ず。(俟箇8)

また、その人を「風流者」という。

C(殷)浩は能く理を言ひ、談論は精微にして、老易に長ず。故に風流者は皆な之を宗帰す。(賞誉86注引『中興書』)

C(戴逵)は少くして清藻有り。恬和にして通任、劉真長(劉惔)の知る所と爲る。性は既に快暢、生を娛しむに泰らかなり。好んで琴を鼓し、善く文を属る。尤も遊燕を樂しみ、多く高門風流者と遊ぶ。談ずる者は其の通隱を許す。屢々徵命を辞し、遂に高尚の称を著はず。(雅量34注引『晋安帝紀』)

また、「風流之冠」とも「風流名士」「名士風流」ともいう。

C(王)献之は文義並びに長ずる所に非ず。而るに能く其の勝会を撮る。故に名を一時に擅にし、風流の冠と爲る。

(品藻77注引『統晋陽秋』)

C咸和中、丞相の王公(王導)は教して曰はく、衛洗馬(衛玠)は当に改葬すべし。此の君は風流名士にして、海内の瞻る所なり。薄葬を脩めて以って旧好を敦くすべしと。

(傷逝6)

C 人有りて袁侍中（袁恪之）に問ひて曰はく、殷仲堪は韓康伯に何如と。答へて曰はく、義理得る所の優秀は、乃ち復た未だ弁ぜず。然るに門庭蕭寂、居然として名士風流有るは、殷は韓に及ばずと。（品藻81）

「風流名士」「名士風流」から知れるように、「風流者」は「名士」ともいい、また「名賢」「名流」「名勝」、あるいは「談士」「談者」「能言之人」ともいう。

A 晏は清言を能くして、当時の権勢なり。天下の談士、多く之を崇尚す。（文学6注引『文章敍録』）

A（鍾）毓は（夏侯）玄の名士なるを以って、節高くして屈すべからず。（方正6注引『世語』）

B 当時の名士、王（衍）・裴（遐）の子弟悉く集まる。郭子玄（郭象）は坐に在りて、挑みて裴と談ず。（文学19）

B（王濟は）乃ち喟然として歎じて曰はく、家に名士有るに、三十年なるも知らずと。（賞誉17）

B 王太尉（王衍）は眉子（王玄）に問ふ。汝の叔は名士なり。何を以って相ひ推重せざらんと。眉子曰はく、何ぞ名士にして終日妄語すること有らんと。（輕詆1）

B 李平陽（李重）は秦州（李秉）の子なり。中夏の名士にして、時に于いて以って王夷甫（王衍）に比せらる。（賢媛17）

B 劉令言（劉納）始めて洛に入り、諸名士を見て歎じて曰はく、王夷甫（王衍）は太だ鮮明なり。（略）杜方叔（杜育）は長を用ふるに拙しと。（品藻8）

C（殷融は）象不尽意、大賢須易論を著はし、理義精微にして、談者は焉を称す。（文学74注引『中興書』）

C 初め（竺）法汰の北より来たるに未だ名を知られず。王領軍（王洽）之を供養す。与に周旋して行き、名勝の許に来往する毎に、輒ち与俱にす。（略）此に因りて名遂に重んぜらる。（賞誉14）

C 謝太傅（謝安）は眞長（劉惔）に語る、阿齡（王胡之）は此の事に於いて、故に太だ厲しくせんと欲すと。劉曰はく、亦た名士の高操なる者ならんと。（賞誉13）

C 丞相の王導は名士時賢を辟して、中興を協贊せしむ。（任誕32注引『王濛別伝』）

C 宣武（桓温）は諸名勝を集めて易を講じ、日に一卦を説く。（文学29）

C 孫興公（孫綽）、許玄度（許詢）は皆な一時の名流なり。（品藻61）

C 謝安年少き時、阮光祿（阮裕）に請ひて白馬論を道はしむ。（略）阮乃ち歎じて曰はく、但だ能言の人の得べからざるのみに非ず。正に索解の人も亦た得べからずと。（文学24）

C 莊子逍遙篇は旧と是れ難き処なり。諸名賢の鑽味すべき所なるも、理を郭（象）・向（象）の外に抜くこと能はず。支道林（支遁）は白馬寺の中に在りて、馮太常（馮懷）と語り、因りて逍遙に及ぶ。（略）皆な是れ諸名賢の之を尋味して得ざる所なり。後に遂に支の理を用ふ。（文

学32)

C 法師(支遁) 十地を研すれば、則ち十住に頓悟するを  
知り、莊周を尋ねれば、則ち聖人の逍遙を弁ず。当時の  
名勝は、咸な其の音旨を味はふ。(文学36注引『支法師  
伝』)

C (謝) 安は能く洛下書生詠を作すも、少くして鼻疾有り、  
語音濁る。後に名流多く其の詠を敷ぬるも、能く及ぶこ  
と莫く、手もて鼻を掩ひて吟ず。(雅量29注引宋明帝『文  
章志』)

C 庾亮・周顛・桓彝は一代の名士なり。一たび和尚に見ゆ  
るや、衿を披き契を致す。(賞誉48注引『高坐伝』)

○(袁) 宏は夏侯太初(夏侯玄)・何平叔(何晏)・王輔  
嗣(王弼)を以って正始の名士と為す。阮嗣宗(阮籍)  
・嵇叔夜(嵇康)・山巨源(山濤)・向子期(向秀)・  
劉伯倫(劉伶)・阮仲容(阮咸)・王濬冲(王戎)を竹  
林の名士と為す。裴叔則(裴楷)・樂彥輔(樂広)・王  
夷甫(王衍)・庾子嵩(庾凱)・王安期(王応)・阮千  
里(阮瞻)・衛叔宝(衛玠)・謝幼輿(謝鯤)を中朝の  
名士と為す。(文学94劉孝標注)

「正始の名士」「竹林の名士」「中朝の名士」を列举する最  
後の資料は、袁宏の『名士伝』である。『晋書』袁宏伝には  
『竹林名士伝三卷』を著わしたとあり、『隋書』経籍志二に  
は袁敬仲撰の『正始名士伝三卷』、劉義慶撰の『江左名士  
伝一卷』、撰者不詳の『海内名士伝一卷』を著録する。

これらの『名士伝』は「風流者」の伝記であつたと思わ  
れるが、「風流」および「名士」に属する諸語が東晋に至つ  
て集中的に現われるのは、上掲の諸例によつて明らかであ  
る。

おわりに

本稿では、「清言」「名理」「玄遠」および「道」「簡」「高」  
「遠」「談」の語が『易』や『老荘』、あるいは仏ともかわり、  
魏のころより西晋を経て、東晋風潮の重要語となる過  
程について、資料を列举し説明した。このことは『統晋陽  
秋』に次のようにいう条と符合することを指摘して、稿を  
閉じる。

正始中、王弼・何晏は、莊老玄勝の談を好みて、世遂に  
焉を貴ぶ。江を過ぐるに至り、仏理尤も盛んなり。故に  
郭璞の五言は、始めて道家の言を会合して之を韻す。(許  
詢及び太原の孫綽は、転た相ひ祖尚す。又た加ふるに釈  
氏三世の辞を以つてし、而して詩騷の体は尽きぬ。詢・  
綽並びに一時の文宗為り。此れ自り作者悉く之を体す。  
(文学85注引)

(広島大学)